

忍法関ヶ原

忍法関ヶ原

ポケット文春 194

1970年1月25日 第1刷

定価 320円

著者 山田風太郎

発行者 檉原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3
TEL (265) 1211
郵便番号 102

印刷 精興社
製本 中島製本

© Futaro Yamada 1970
Printed in Japan

万一落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

忍
法
関
ケ
原

山
田
風
太
郎

文
藝
春
秋

目次

忍法関ヶ原……………5

忍法天草灘……………81

忍法甲州路……………155

忍法小塚ツ原……………227

装
幀

村
上

豊

忍
法
関
ヶ
原

一

近江国坂田郡といえは琵琶湖の東北隅にあたり、伊吹山から出る姉川が作る小平野だが、ここに国友村という村がある。

古来、これは国友鍛冶^{かじ}として聞えた村であつた。となりの浅井郡に鍛冶部^{かぬちべ}が住んでいて、それが集団移住したらしいという説もある。古記録によると、一村七十三軒、五百人ことごとくが鍛冶屋であつたという。しかも、鋤鋏などを作るのではなく、刀、槍などを製造する、いわゆる打物鍛冶である。

それが、いつのころからか、鉄砲鍛冶に変わった。——「国友鉄砲記」によると、天文年間、種子島から鉄砲を献上された時の將軍足利義晴が、この国友村に、善兵衛、藤九左衛門、兵衛四郎、助太夫という甚だすぐれた四人の鉄匠がいることをきき伝えて、その鉄砲を下賜し、そ

れを模して新しく鉄砲を作することを命じた。それによって四人が、半歳の苦心の末、ついに二挺の日本製鉄砲を製造したのがそのはじまりだという。

これより「国友鉄砲」の名はひろく世に伝わり、戦国の諸大名から注文が殺到し、ちょっとした「死の商人」的な鉄砲の産地となった。が信長が天下を一統すると同時に、完全にその独占するところとなった。これを直接支配したのは、国友村のすぐ南にある長浜の領主羽柴筑前である。

「国友の内を以て百石扶助せしめ候。全く知行あるべく候。鉄砲の儀、前々のごとく相違あるべからず候。仍て件の如し。」

天正二年八月吉日

藤吉郎秀吉

という、国友村の長老にあてた秀吉の文書がある。百石の知行とひきかえに、鉄砲の注文に厳重な統制を受ける義務のあることを申し渡したものだ。

秀吉が天下の覇者となると、むろん国友村はいよいよ豊臣家の専用兵器廠になったが、こんどは直接にこれを支配したのは、同じ坂田郡佐和山の城主となった石田三成である。国友村は彼の領地に組み入れられた。

彼は左のごとき掟書を下した。――

「一、仰せなされ候鉄砲、随分入念に張り立て申すべきこと。

一、急ぎ御用の節はお手支えなきように、常に相心得申すべきこと。

- 一、諸国より大小の鉄砲多く誂え候わば、早速相届け申すべきこと。
 - 一、鉄砲職の者、みだりに他国へ出候ことかたく無用のこと。
 - 一、鉄砲細工、みだりに他人に相伝え申すまじきこと。
 - 一、鉄砲薬調合のこと、他見他言いたすまじきこと。
- 右の条々、かたく相守り申すべきもの也」

二

慶長五年六月。――

それまで大坂にあって、太閤死後の天下ににらみをきかせていた家康は、会津の上杉景勝謀叛の情報に、これを鎮圧すべく、三千の兵をひきいて東征の旅に上った。十六日、大坂を発し、十七日、伏見に入る。

この夕、家康は伏見城天守閣の千畳敷の大広間のまんなかに一人立ち、何思ったか、四方を見まわしてにこにこ笑っていたという。城をあずかっていた鳥居元忠が、家康の帷幄いあくの臣本多佐渡とともにふしぎそうにそれを見ていると、

「彦右衛門、この城はな」

と、家康の方から話しかけて来た。

「太閤が日本じゅうの人数を集めて築いた城じゃ。何かことあれば、この本丸天守閣に使うてある金銀を鑄ても当座の鉄砲玉にことは欠かぬぞ」

「金の鉄砲玉、銀の鉄砲玉をくらっては、敵も驚くでござりましような」

と、鳥居元忠が笑ったとき、家康はふと笑いをとめてこちらを見まもり、

「佐渡、鉄砲村のことはどうなっておるか」

と、きいた。

「は。――」

「近江の国友村の件よ」

「さ、そのことについては」

と、本多佐渡守はくびをかしげ、一思案のていあって、

「あれはこの際、やはり服部をやった方がよいかもしれませぬなあ」

と、いった。

それからこの水魚のごとき君臣は、鳥居元忠を退けて、二人で何やら密語をはじめた。

家康の軍の中に従っていた徳川家忍び組の頭領服部半蔵が、配下の十人をつれてこの大広間に召し寄せられたのはそれから数刻のちであった。

服部組が伏見城のこんなところに参入を許されるのははじめてだ。半蔵自身「……そも何

事？」と怪しむ表情でそこへ入っていったが、もう長い夏の日も暮れかかっているのに灯もつけず、しかもその千畳敷のまんなかに、自分と呼んだ本多佐渡守のみならず、なんと大御所の姿まであることを知って、はっとした。彼らはいっせいにひれ伏した。

「近う。秘命を伝えるのはかような大広間が一番よい。半蔵、ここへ」

と、佐渡守はさしまねいた。

十一匹の蜘蛛のごとく滑り寄る服部組を見まわして、大御所がくびをかしげた。

「ほ、女もおるか？」

「最も手練れ^ての伊賀者十人を召しつれよ、との仰せにて、かくは参上つかまつってござりまする」

と、半蔵は答えた。十人の配下のうち、たしかに白く美しい女の顔が二つばかり見えた。

「くノ一じゃな」

と、佐渡は笑った。

「よい。くノ一ならば、かえって好都合のことがあるかも知れぬ——御用じゃ」

「御用とは？」

「実は、近江に国友村という鉄砲鍛冶の村がある。——」

「存じておりまする」

「いや、他のものどものためにも、念のため申しきかせておこう」

本多佐渡守は、国友村の歴史について語り出した。その概略の知識は半蔵にもあったが、やがて佐渡の——先年よりその国友村へ手を回して、一村そっくり徳川家に随身するように働きかけ、まずいまのところ十中七、八分まで、その年寄たちの心を動かしておる、という話をきくに及んで、いまさらのことではないが、この人物の稀代の策士ぶりに心中舌をまいた。なぜかという。——

いま、佐渡自身が、うす笑いしている。

「あと二分、三分、心もとないところがあると申すは、何しろその国友村は石田治部じぶの領内じや」

石田治部少輔三成が、徳川家にとっていかなる人間か、ということは、むろん半蔵は知っている。それどころか、忍び組の頭領として、このたび大御所が東方の敵を討つと見せかけて、その実何を西に待っているかも推察している。

すなわち真の大敵石田三成の領内に存在する鉄砲村を、そっくり味方につけようとは——その大胆不敵、人をくった奇謀はたとえるに言葉もない。

「万一、石田に知られたら——と、国友村が恐怖するのもこりゃ当然じゃ。が、二分、三分のあいまいさが、もとの木阿弥もくあみ、すべて御破算につながっては一大事じゃ。この際、国友村がこちらの手につくか、治部の全面的な支配の下に置かれるかは、徳川の安危につながると申しても過言ではないぞ」

「治部どのは、そのことにまだ気づいておらぬのでござりまするか」

「まさに燈台の下、まさかとはじめは意にも介してはおらなんだが、話の進むに従って、どうやらきな臭い顔を国友村へ向け出したような案配でもある。万一露見したらぶちこわしじゃから——せめて、せいぜい石田のためにあまり働かんでくれい。石田からの鉄砲の注文も、事に託してなるべく間に合わせんでくれい——と、話はそこでとめてある」

佐渡はいった。さっきまでの笑顔が消えて、むずかしい表情になっていた。

「が、いろいろと案ずるに——このときにあたり、その件、しかとだめを押しておきたい。国友村を完全に徳川家のものとしておきたいのじゃ」

「は。——」

「特に、国友村の頭分の中に四人の鍛冶あり、国友鎌太夫、鉄算、鍋三郎、鋤右衛門という男どもじゃが、これらの伝える鉄砲作りのわざは聞くだに容易ならぬものがある。それを思うと、いよいよ以て彼らのわざを石田に使わせてはならぬが、またこやつら、おのれの腕に自信があるだけに、いずれも煮ても焼いても食えぬしぶとい根性の持主、二分三分の不安というは、実はこの四人が煮え切らぬからともいえる。——」

「鎌太夫、鉄算、鍋三郎、鋤右衛門。——」

「されば、いま服部組に申しつける御用は二つ。……一つは、なんじらこれより国友村へ潜入し、右の四人の鉄匠を完全に徳川家へなびかせること。それから。——」

佐渡は指を折って、

「三カ月のち、まず九月半ばまでに、その証^{あか}しとして、一貫目玉鑄銅砲五挺、八〇〇目玉鑄銅砲十挺をひそかに急造させ、石田領の外に運び出させること」

「あ！」

服部半蔵は、そんな声をあげた。秘密の重さ、大きさに、はじめてなぐりつけられた思いだ。
「むずかしいぞ」

「……………」

「いま、国友村に潜入することすら容易でない」

「……………」

「しかし、徳川名代の服部組じゃ、先代半蔵より、これまで尽してくれた数々の働きに徴しても、決して不可能の御用でない佐渡は信じておる」

「はっ」

それまで黙ってこの命令授受をきいていた大御所が、もともと膝の上の布をひろげ出した。

「その大砲、石田の領外に出たら、これを荷旗とせい」

葵紋のついた一旒^{りゅう}の旗であった。

「天下御免の旗、それを末長く服部組の誉れの旗とせい。もとより服部一統の栄達を保証する旗でもあるぞ。寄れ、半蔵」

満面に笑みをたたえて、大御所は手ずからその旗を半蔵に授けた。半蔵のからだに死ものかはという感動の身ぶるいが走り、彼は眼に涙さえにじませた。

家康はいった。

「この国友村鉄匠の争奪戦。——これはいわば、影の天下分目のいくさでもあるぞよ」

翌日、大御所の軍は、十一人の数を減じて東海道を東へ立った。

だいたい同じところである。

江州佐和山城で、石田三成と何やら談合していた家老の島左近は、もう夜に入っていたのに、特に名ざして十人の家来を呼んだ。そして、領内国友村に不審な者の出入せぬよう、それとなく見張ることを命じた。

「徳川より唾つけられるおそれがあるからよ」

というその理由に、呼ばれた十人の中の頭分らしい男が精悍な顔をふりあげた。

「それとなく？ わが領民にそのような御遠慮は御無用ではござりませぬか」

「国友衆は石田家の宝じゃ」

と、左近はくびをふった。

「それに、職人らしく、あれで内心なかなか傲岸な変り者が多い。へたにあしらってへそを曲げられてはかえって当家のおんためにならずと、腫物にさわるように特別扱いをして来たが」